

# ○○上伊那

平成27年1月29日

## 巻頭言:「上伊那の医療・福祉・教育を一つの連携に」

伊那養護学校 伊藤潤

長野県を、いや全国の障害者福祉を長年リードし、導いてこられた『福岡寿』さんをご存知でしょうか。教職経験もある福岡さんは実は教育についても深いところで考えておられる方です。定期的に厚生労働省に出かけられ、福祉にかかわる法律作りにも携わっていて、「これからの福祉」についてより具体的に方向を考えておられる一番の方だと考えています。その福岡さんは「教育と福祉の連携」という本の中で『連携』についてこんな文を書かれています。

…どんな分野でも、誰かのお座敷に、他の人が食い込むのは簡単ではない。

どの分野(医療・福祉・教育)にも積み上げてきた流儀があり、氏素性や絵柄も違えば言語も簡単で同じではない。

でも、発達障害を有する子どもとその親御さんには、様々な関係機関の、様々な分野からの「よかれ」という思いからの、「連携なき」「一過性」の支援が「無定形」に投下され続けてきたし、今もされ続けている…。

ある母親が話した「真っ暗闇の大海の中で、たいまつを灯して、こっちの方がいい灯ですよ、いやいや、こっちの灯が正解ですよ…、と近づいてくる灯についていけばいかに岸から遠ざかっていった気がする」と。本当は、岸からの、がっしりとした燈台のサーチライトが欲しかったのに…。

とりわけ福祉と教育は近いはずではあるのに、容易に渡りがたき川がある。両者は相互に、実は困ったと思っている現状がある…。

上伊那圏域の連携の状態は、当の本人・保護者にいかように映っているのでしょうか。

真っ暗闇の中、支援者サイドの一方的で「無定形」の支援投下に戸惑い、世間の波に揺られ、行く先の見えない中、不安で漂っている本人・保護者はいないのでしょうか…。一人の支援について、学校の中で、相談機関で、福祉関係者で、医療関係者で言っていることが食い違い、保護者から見れば他の分野・機関に擦り付け合うような状態になっていないのでしょうか…。学校は学校に通ってきている時だけ責任がある、とはとても言えず、だからこそ「個別の教育支援計画」を記しているはずなのですが、本号の後述、「支援をつなげるシートの作成を目指して」に記してある通り、情報が活用されなかったり、情報の存在すら忘れ去られていたりする状態があります。だからこそ、できれば一刻も早くに「岸からの、がっしりとした燈台のサーチライト」で確かな方向を示し、関係機関が相互に機能し合った支援が進められる場を整備できればと願ってやみません。ところが、「積み上げてきた流儀があり、氏素性や絵柄も違えば…、近いはずではあるのに、容易に渡りがたき川がある」のです。前号で「今こそ、各学校・地域では、関係機関等障がいのある児童生徒の支援に携わるすべての方々の力を結集して「個別の教育支援」の整備を図るべきではないでしょうか。地域の社会資源の積極的な活用こそ、インクルーシブな教育の実現、共生社会の形成につながると考えます。」と記しましたが、各分野の間にある渡りがたき川を越えるには、関係者の熱き思いの結集が必要で、その思いこそが本人保護者が望む、一枚岩の「がっしりとした燈台」をつくるに違いないのです。

今、次年度に向け、上伊那地域の医療・福祉・教育が一つにつながり、密接な関係となるべく、「連携の在り方」を模索しています。まず、手始めに上伊那の特別支援教育がより機能的に、リーズナブル(合理的)にまとまる必要がありますが、先生方、これから「渡りがたき川を越える熱き思い」をもって、上伊那の医療・福祉・教育を一まとまりの連携に推進しようではありませんか。お願いします。

# 「高等学校における特別支援教育の取り組み」

長野県箕輪進修高校（多部・単位制高校）  
特別支援教育コーディネーター 北原恵美

上伊那地域の特別支援教育に関係する皆様には、平素より高等学校との信頼の上に教育的ニーズのある生徒について申し送り等を丁寧にしていただけることを心より感謝しております。中学校特別支援学級在籍生徒の高校への進学率は全国平均が3割弱であることに對し、長野県は6割を超えることが報告されています。このことは、高等学校入学後も支援の継続が可能であること、または「期待」があることにつながります。高校の特別支援教育コーディネーターをはじめ多くの教職員が認識する必要があります。

高等学校に於いては対象生徒の在籍数や状況により、学校間には支援体制や取り組みについて差異があります。特別支援教育は幼児期からの一貫した支援の継続と方向性を要求されながら、一人一人の支援の必要に応じた教育対応を連続的に展開できる体制を保障することには未だ困難が多いと言えます。学校全体に特別支援教育の理念が定着しにくい場合、実際の課題克服（支援）はキーパーソンとなる教職員の自助努力によるものとなっている現実があります。しかし、高校各校には支援のための委員会が組織されコーディネーターの指名は100%となりました。中高のコーディネーター連絡会も定着しています。今後は「合理的配慮」をキーワードに各高校においても具体的な支援が展開されていく方向にあると考えられます。

県内各地域で高校の統廃合、新たな教育制度の導入もあり様々な形態の高校が出現する中、上伊那では教育的ニーズのある生徒の多部制・単位制高校への進学率は高く、地域高校や夜間定時制と同様に、少人数で細やかな対応が可能な学校・課程に集中している実態があります。現実にはこうした高校における特別な教育的ニーズは発達障害、身体的障害にとどまらず不登校経験生徒、知的障害、精神疾患など広範囲な捉えとなり、特に病理を抱えながら学校生活を送る生徒、貧困、外国籍などの家庭的な背景に対しては、これまで以上に専門家、地域の「労働」「保健」「医療」「教育」が連携することが必須です。高校に入学することだけが最大の目標とならぬよう、生涯にわたる社会的支援に繋がる道を保護者と共にえがくことが重要になります。

箕輪進修高校では2014年から3年間、文科省「個々の能力・才能を伸ばす高等学校における特別支援教育」モデル研究校の指定を受けています。ニーズを持つ生徒がそれぞれの能力や個性を生かし将来希望する職業に就き、社会人としての役割を果たすことは特別支援教育の視点なしには達成できるものではありません。現在は高校の教育課程にはない「自立活動」について研究を進めながら柔軟性を持って個別の支援、全体の活動を行っています。指定校にはそれなりの苦労があると認識しますが、一定の成果を実現するには、途切れることのない努力が求められます。今後ともご指導、ご協力をお願いいたします。

## 支援をつなげるシートの作成をめざして

上伊那圏域自立支援協議会 療育部会長  
小笠原 博文  
(伊那養護学校)

「上伊那圏域自立支援協議会」という組織をご存じだろうか。この組織は障がいのある方々の支援に関わる福祉、医療、行政、労働、保育、教育等々の仕事に携わる方々が、地域が抱えている課題について検討し、行政面への働きかけを通して障がいのある方々の生活の改善をめざしていこうとする組織である。長野県にはこうした組織が郡ごとに置かれている。この会の下にはいくつかの部会がある。私はその中の療育の部会でその長を仰せつかり、今年で3年目になる。

さて、この療育部会では、今年支援をつなげるシートを作成するための取り組みを始めている。特別な支援を必要とする方々の支援を幼少期から年老いていくまでつないでいこうというわけである。

これまでの療育部会でも、特別な支援を必要としている方々への支援をどうしたらいいか、現場での取り組みや実践事例の報告、講演会、施設見学等々を通して検討や研究が重ねられてきた。しかし、参加者がその時はそれぞれ反省や課題を持ちながらも、現実には次の一歩が踏み出せずにいた。今年はその第一歩を踏み出そうと考えたのである。

また、今まで部会での検討を通してたびたび挙がってきた大きな課題につなぎや連携の問題があった。例えば、市町村によっては就学前の子どもの様子を記入したカルテのようなものがあるが、そのカルテが小学校に入学してからあまり活用されないままだったり、場合によってはその存在すら忘れられていたりすることもあった。特別な支援を必要とする方々が利用する機関ではそれぞれが本人のために懸命な努力をしている。その成果を縦にも横にもしっかりとつなげ、支援を受けたい方々がより生活しやすくなるようにしたいと考えた。

以上のような理由から今年の療育部会はこの課題に取り組もうと考え、まずはこのシートの記入や使用に関わる方々の意見を聞くことから始めることにした。立場の違いによってシートの扱いやそこに盛り込みたい内容も異なってくるだろうと考え、保護者、福祉施設・高校、小・中学校、保育・行政・医療の方々にそれぞれ時期を分けて集まっていただき、その思いを遠慮なく出していただいた。そこではさまざまな案や要望が出され、これらを一つにまとめ上げていくことに難しさを痛感したが、参加していただいた方々の熱意に私達の背中を押された気もした。

今は4回のワーキンググループでの検討を終え、今年の最終回（3月）ではこれらの結果をまとめて「こんな内容にしたい」というものを提案したいと考えている。最終回でもまた大勢の方々、いろんな立場の方々からのさまざまな意見をお聞きできればと思う。年度内にシートの内容の骨子が決まり、来年一年かけて完成に持っていければ幸いと個人的には考えている。しかし、使用するのは本人や保護者であり、現場で支援する方々である。無理に急がずにいいいに進めていかなければならないのは当然のことと考えている。

このたび特別支援教育委員会の役員の方から原稿の依頼をいただいたことは私にとって幸運であった。それは、私達が今進めている取り組みに一人でも多くの関係する方々に知っていただくことができるからである。私はこのシートが駅伝のタスキのような役割になってくれたらと思っている。それぞれの時期の支援を担当する方々が任された区間を全力で走り、その成果を次の時期を支援する方々に確実に伝えていく。そんな支援が本人が年老いていくまで引き継がれていかれたらと思う。

さらに、私には夢がある。このシートが何も障がいのある方々だけに限るものでなく、子育てに困った保護者や生きにくさを感じた本人が、いろんな機関や専門家に助けられながら幸せに暮らしていけるためのツールにもなれば最高である。そんな願いがいつの日か現実のものになればと思う。



## 「自立活動教員の巡回を振り返って」

今年度、伊那養護学校の自立活動担当教員として7つの小中学校の自情障学級を巡回支援させていただいています。ほぼ1ヶ月に1回のペースで訪問。子ども達の様子を参観させていただいた後、担任の先生と懇談の時間をもちます。

担任の先生は様々な悩みをもちながら子ども達の支援にあたっています。『学校の日課の流れに入れな  
ときは？ 活動の切り替えがうまくいかないのですが？ 落ち着いて意欲的に学習に取り組めるようにする  
には？ なかなか集団活動に入れな  
子をどうしたらよいか？ 不安が強いとき、パニックになってしまったとき  
のクールダウンの方法は？ 友だちとうまく関われるようにするには？ 行事にどのように参加したらよ  
い？ 中  
学校に向けてどんな支援をしていったらよいか？』等々…。

懇談の時間には、先生方のお話と個別の指導計画を基にその子にどん  
な支援が必要なのかを一緒に考えさせていただいています。そのときに1  
番大切にしていることは、『その子がどんな困り感を持っているか』『その子  
のよさや得意なことを生かせないか。』ということです。とかく私たち教師は  
「この子にこうさせたい、こうあるべきだ」という教師側の思いに縛られてしまいます。でもそれではなかなかう  
まくいきません。子どもの思いから出発し、考えることで支援の方向が少しずつ見えてきます。その子が見通  
しを持って自分から活動に入るようにするにはどうしたらよいか、少しずつでも自己肯定感を高められるよう  
にするにはどうしたらよいか…状況づくり、学習活動、関わり等々子ども達から教えてもらうことはたくさんあり  
ます。それを一緒に考えていきます。



巡回支援を重ねていくと、訪問のたびに子ども達の表情が変わっていくのを感じます。担任の先生と子ども達  
の絆が強くなり、自情障学級が子ども達の『心の基地』となっていきます。安心できる場所があることで、少し  
ずつ変わっていく子ども達。子どもってすごいな…そんな姿をいくつも見せていただきました。貴重な機会をい  
ただき、私自身多くの学びがありました。子ども達が安心して力を伸ばせる『心の基地』なる学級・学校へ。先  
生方と一緒に支援を考え合い、微力ではありますがお手伝いできたなら幸いです。

(伊那養護学校 藤田あゆみ)

巡回先の学校で、1対2の教科学習の様子を参観しました。ある生徒は教科担任の先生との折り合いが難  
しいようで反抗的な言葉を一方的に言い続けていました。開始時に座っていたものの1時間中席には着か  
ず、勢いよく歩き回り否定的な言葉はやむことがありませんでした。急を要する状況です。生徒の言い分を受  
け止め、生徒への支援と担当する職員への心的ストレスを回避することも重要だと感じました。校内支援会議  
で支援方法と対応策を検討することを提案しました。そして一ヶ月後に同じ教科担当の先生とその生徒の授  
業を参観しました。明るい声で学習をしている生徒の変容に驚きました。聞くと生徒の願いを半分は受け止  
め、職員配置を工夫してチームで支援するようにしたとのことでした。この事例が教えてくれたことは、巡回相  
談の際、管理職の先生と一緒に相談に参加していると、職員の人的配置や環境的な資源等を改善に向けて  
調整がスムーズであること。コーディネーターと管理職が中心になり校内支援体制を整えることが重要だと感  
じました。

支援して有効だった具体的な手立てをチームで共有したり、引き継ぎを丁寧に行ったりして、特別支援学級  
担当が孤立しない体制になるように願っています。先生たちみんなが貴重な資源を持っています。力を合わ  
せてチームで支援をして、子どもたちのニーズに応えていきたいものです。今後の巡回相談支援は27年度に  
は30校、29年度には上伊那郡内すべての学校の自情障学級が対象となります。

(伊那養護学校 大原義博)